

芸能

人生見据える力、歌の中から

ビルギット・ニルソンを悼む

音楽評論家 畑中良輔

「巨星墜つ」という言葉は、普通は男性に使われるもののように思われるが、

「ニルソン死す」の知らせを受けた瞬間、私の頭をよぎったのはこの言葉だった。

性差を超えた揺るぎない存在。ビルギット・ニルソンこそは20世紀最高のソプラノだった。あえて「巨星」を付けて呼びたいもう一人の音楽家ホッター（バス・バリトン）と並んで、この2人の存在はカラスやデル・モナコたちへの熱狂、熱愛とは異なる世界へ私たちを導いてくれた。

私が初めてニルソンを聴いたのは、64年にウィーン



67年、来日リサイタルで強烈な声の魅力を披露したニルソン（大阪国際フェスティバル協会提供）

国立歌劇場で上演された「トゥーランドット」だった。

た。日本では想像もつかない奥行きのある舞台に設けられた大階段の最も高い場所から、「この宮殿に」の第一声が響いてきた時、満場の聴衆はまさに電撃的ショックを受けた。強大なオーケストラが鳴り渡るその奥から、目もくらむような輝か

しい、強靱な「声」が突き刺さってきたのである。

円熟期へさしかかろうとする時期にあつて、この

年、ザルツブルクの夏の音楽祭では「エレクトラ」をカラヤンと共演。ホルの床が抜け落ちんばかりの強烈な音響の中、復讐を遂げ、大地を踏みならして踊り歌うニルソンの声の力は、空前絶後のものであった。

また、バイロイトにおける「トリスタンとイゾルデ」の《愛の死》の精妙極まるピアノシモ。この最後の嬰へ音は、それこそ永遠へと向かう「至高の悦び」に満ちた世界へすべてを巻き込んでいった。この陶酔を求めて、67年、大阪国際フェスティバルで上演された「トリスタンとイゾ

ルデ」には全国からワーグナーファンが駆けつけ、私も公演のたびに大阪通いをしたものである。

彼女の声はドラマチック・ソプラノではあるが、半面、リリックな表現に優れ、強大なフォルテから最弱のピアノシモまでのデリケートな感情表現に深さを聴かせる。3オクターブに及ぶ声は完璧にコントロールされてムラがない。ホッターは歌の中に人生をあるがままに受け入れたが、ニルソンは人生を見据えるしたたかな力を歌の中から取りだした。

いま21世紀のプリマたちは、賢く歌って私を感じさせる。しかし、ニルソンのような感動を与えてくれるソプラノにはまだ出会えない。